
小狐レキの転生記

捺木ナツメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小狐レキの転生記

【Nコード】

N8396V

【作者名】

捺木ナツメ

【あらすじ】

私、佐倉暦さくらしほは熱中症で死んで転生しました。十六年しか生きていませんが、元々引つ込み思案で内弁慶、部活でも下っ端だったのでさして未練はありません。生まれ変わって異世界ライフを楽しもうと思います……けど、何で私、下っ端妖怪の善狐として隣町に転生してるんですか！？ * * * 隣町に妖狐として転生してしまった元・佐倉暦、現・レキこと詠よみが妖怪や呪術師、陰陽師に巻き込まれながら送る隣町転生記。

001：命あつての狐（前書き）

乏しい文才ですが頑張りますのでよろしくお願いします。

001：命あつての狐

皆さん、こんにちは。

突然ですが、皆さんは妖怪を信じますか？

妖怪というのはあれです、学校や墓場に出るお化けのことです。

子供のころは信じた、と言う方は多いでしょう。

見たことがある、という方も中にはいらっしゃるかもしれません。

でも、心の底から信じる、という方はそうはいないと思います。

え？

私ですか？

信じますよ、当然。

だって私——佐倉暦さくらしほみは転生して妖怪になってしまったのですから。

* * *

私は元々、十六歳の女子高生でした。

部活は新聞部というちよつと変わった部に所属しております。

中学のころは運動部だったのですが、興味本位というか「部室は冷暖房完備！」という甘言に誘われたというか。部室はパソコンだらけなのでよく考えれば当たり前なんですけど。

けど、それが間違いでした。

七月、野球部最後の大会ということで、部内の下っ端の私が大会

の取材に行くことになりました。

決して強豪校ではない我が校のこと。

どうせすぐに負けるだろうと甘く見ていたのが間違いでした。

何と何と、両者一步も譲らぬまま、延長十五回。

その頃には水筒の中も空っぽで、私は汗をかくこともできないほどの脱水症状になっていました。

同じスタンドにいた吹奏楽部が応援部に助けを求めればよかったのですが、引っ込み思案で内弁慶の私にそれが出来るはずありません。

ふっと目の前が真っ暗になったかと思うと、私、死んでました。

怨むなら地球温暖化を怨みましょう。取材に任命した部長は怨みますまい。取材した私がいなくなったことで、すでに「メ切り前に裏面真っ白」という恐怖を味わっているでしょうから。

あ、でもこの場合は新聞作成どころではないんでしょうかね。

話が逸れました。

戻しましょう。

それまでじりじりと照り付けてきた日光も、ねっとり絡み付いてきた湿気も全てシャットアウトされて、私は気が付けば暑くもなく寒くもない暗い空間に漂っていました。

体はあるのですが、動こうとしても動きません。

一日中、目一杯働いた後のような柔らかな疲労が体を支配しています。

まるで生命誕生の母なる海に漂っているような。
そんな穏やかな気持ちで、変化が起こるのを待ちます。

死んだからには転生があるのでしよう。

出来れば魔法が使える異世界に生まれたいものです。

そうしてひたすら待っていると、不意に髪が白色に変色しました。

白髪の人間に生まれ変わるのでしょうか？

変色した髪はどんどん短くなっていきます。赤子として生まれる
のですから当然でしょう。

腕も短くなって、可愛い前足になりました。

——え？ 前足？

肉球のついた可愛い前足。

それが先程まで手があった位置についています。

そして体中にわさつと白い毛が生えます。毛深いなんてもんじゃ
ありません。毛だらけですから。

さらにお尻のあたりがむずむずしたかと思うと、立派な尾が一本、
生えてきました。

……え？ 狐？ 人間じゃないんですか！？

完全にパニックです。

当然、人間かもしくはエルフとか妖精とかニンフとか、人型のフ
アンタジックな種族になるものだと思いますから。

そうしているうちに、暗い空間に一筋の光が現れました。

その光がどんどん強くなり、辺り一面光に包まれたかと思うと、
私は森の中に倒れていました。

少し肌寒い森の中、肺を満たすのは新鮮な空気。

ここは何という世界なのでしょう？

まずは情報を得ようと、私は四本の足で何とか立ち上がりました。

あれ？

狐って、生まれてすぐに立ち上がれるものでしたっけ？

第一、母狐はどこでしょう？

私はたった一匹で森の中にいました。

近くにあった池に自分の体を写してみると、ふさふさした白い毛
の立派な大人の狐がそこにいます。

どういうことでしょう？

私は頭の中を「？」マークで一杯にしながら、取り合えず食べら
れるものを探すことにしました。

鋭敏になった鼻をひくひく動かすと、食べ物の匂いが流れ込んで

きます。

一番美味しそうな匂いのする方へ走ると、突然森が開けた広場に出ました。

よく見ると、向こうの方で人間のような者やそうでない異形の者が酒盛りをしています。

ああ、やはり異世界に来たみたいです。

この際、狐だと言うことには目をつむりましょう。

宴席には見るも恐ろしい魔物も混じっていますから、狐はまだまだ良い方だと言えます。

酒盛りの中の一人が、ぽつんと立っている私に気がつきました。

「新入りか？ お前も一緒に混ざらないか？」

頭に鈴を飾った美しい女性が私に話しかけます。

とにかくお腹が減っていた私は、すぐに宴席に加わりました。

言葉が通じるのが気になりましたが、きっとそういうものなのでしょう。流暢な日本語に聞こえるのも気のせいです。だってここは異世界なのですから。

狐の私も難なく言葉を使うことが出来ました。てっきり口から出るのは狐の鳴き声だと思いましたが。

お酒が入って陽気になっている女性は、私の質問に怪しむことなく答えてくれます。

「え？ ここはどこかって？ カミサワだよ。カミサワ。山神様に

愛された地さ。え？ この世界は何と言うか？ さあ……あたしもこの世としか……あ、人間は『大和』とか『日本』って呼んでるみたいだけど」

どうやらここは、日本という世界のカミサワという地のようです。

——はい？ 日本？ カミサワ……上沢？

って！ 私が住んでいた町の、隣の町じゃないですかっ！？

「しかし、あんたも変なこと聞くねえ……あんた、あたしらの仲間かい？」

仲間……とおっしゃいますと？

もう嫌な予感しかないんですが。

「妖怪だよ、妖怪。あんた、見たところ善狐だろ？ 妖狐の中でも下っ端の」

知りませんでした。

転生って人間に生まれ変わるだけじゃないんですね。

いや、確かにファンタジックな種族を希望しましたが、妖怪とかもセーフなんですネ。

新聞部で下っ端だった私、佐倉暦は、隣町に下っ端妖怪の善狐ぜんことして生まれ変わったようです。

002：溺れる狐は藁をも掴む

* * *

真つ白な耳。

ふわふわの尻尾。

潤んだ黒い両目。

水面に写った自分の姿に、元・佐倉暦、現・詠は溜息をついた。

転生してからかれこれ三日。

慣れない四足歩行に苦心しながらも、詠は森の中を食べ物を探めて彷徨う日々を送っていた。

狐の食べ物と言えば、鼠や兎など元人間の暦にはきついものばかり。

せめてお米が食べられる雀に生まれ変わりたいかっただと思うが、すでに後の祭り。人間から妖怪に生まれ変わっても、「下っ端」というところだけ引き継がれているのが悲しすぎる。

季節は春の初めらしく、冬でないだけでしたが、意外に食べ物が見つからない。野苺の類があってもよさそうなのだが、本当に何も無い。

大人の状態で生まれたのがせめてもの救いだっただ。

とはいっても、妖怪は基本的に何もないところから成体で生まれる。稀に親がいて、子供の状態で生まれる妖怪もいるが、それはほんの例外だ。今、名乗っている「詠」という名前も自分で勝手に付けたもので、名付け親もいなかった。

学校も試験も無いが、これだったら下っ端高校生をやっていた方がまだましだと詠は思う。下級妖怪は人や動物に見えないなんてことは無いので、獲物として熊に追い掛けられたこともあるし、昨日は「美味しそうだから」という理由で妖怪に襲われた。

転生してからの三日、詠はろくな食事を摂っていない。

妖怪が言う「お腹が空いた」とは、妖力の枯渇である場合が多い。下級妖怪が腹を満たす方法は三つ。動物と同じように飲み食いするか、他の妖怪を食べるか、もしくは大地から妖力を吸収するかだ。妖怪を食べるなんて以つての外（むしろ食べられる側）で、詠は未だに食事らしい食事をしていない。

彷徨うのにも疲れた詠は、住み処としている茂みの近くの川まで戻って、地面に伏せていた。三つ目の方法、大地から妖力を吸っているのだ。微々たる物だが、お陰で死ぬほどお腹が減っても、死ぬことはない。というより、この方法があるから、大抵の妖怪は食われるか殺されるかしない限りは永久に生き続ける。永久に空腹地獄というのも困るが。

（お腹空いたな……）

ふと視線を移すと、川の中を時々キラキラ光る魚が泳いでいくのが見える。川魚はあまり好きではなかったが、この際贅沢は言ってもらえない。

ぐったりした体を引きずって川に入ったが、何せ魚の掴み取りなんて前世で小学生のときにやって以来だ。北海道の熊ならいざ知らず、しがない下っ端妖狐に転生して、拳空空腹状態の詠が魚を捕まえられるはずがない。

魚は前足の間をくぐり抜けていくし、体は冷えて動きは鈍るし、尻尾は水を吸って重くなるしで、すぐに嫌になった詠は、癩癩を起

こして水面を無意味に叩いた。

「もう、やだっ！」

バシャバシャと水を宙に撒き散らす。春の日差しに煌めいたそれは、木の葉を濡らし、詠の毛皮を濡らし――

辺に立っていた見ず知らずの黒狐をも濡らした。

「あ……」

白い詠と対照的に黒い狐。狐のくせに狐目でない詠と違って、黒狐は鋭い目でじつと詠を睨みつけている。無言なところが一層怖い。

「あのー……目、怖いですよ……？」

これが決定打だった。

黒狐の周りに青い狐火が五つ現れる。
それが詠に襲い掛かって来たのだ。

「ひゃあああああっ！？」

食われる！

これは食われる！

絶対に食われる！

バーベキューにされちゃう！

狐火に襲われる恐怖は、妖怪に直接襲われる恐怖の比ではない。
何しろ狐火は見たまんまお化け。人魂に追い掛けられているのと大

差ないのだ。

幅広の川を渡って逃げようとするが、中々深さがある。四分の一も行かなうちに足が着かなくなり、半分くらいで詠は流されはじめた。

しかし岸には黒狐、後ろには狐火。

止まるわけにはいかないが、狐の体は泳ぐのには向いていない。尻尾はただの重しだし、前足だって犬掻きしても大した推進力が出ない。

（死ぬ！ 溺れ死んじゃうよ、これは！）

転生してから三日で死ぬとか、笑いたくても笑えない。

だが、運良くもがいていた前足が木の枝に引っ掛かった。狐の足は物を掴むものにも向いていないが、詠は死に物狂いで藁のような細い枝にしがみつく。

するとどこからか人間の腕が二本伸びてきて、詠を岸に引きずりあげた。

「けほっ！ けほけほっ！」

喉から水が出て行き、変わりに酸素が肺の中に流れ込む。酸欠で霞む意識を無理矢理引き戻して、詠は目一杯空気を吸った。

「大丈夫？」

詠を助けたのは、佐倉暦と同じくらいの歳の少女だった。着ているものから判断するに、おそらく人間だろう。

狐が妖力を持っただけの善狐は、普通の人間にも見ることが出来る。詠には、そのおかげで白い野犬として追い回された苦い経験があった。

だから少女には詠は「ただの白い狐」としか見えていなく、詠が話し掛けてもその声は届かない。

「おい、生きてるかー？」

ぐったり体を投げ出し、荒い息をする詠に少女はちょっかいを出す。詠はそれを無視した。構う気も逃げる気もない。もとい、その力がない。

しかし、あんまり少女がうるさいので、恩人だということを忘れて、詠はつい怒鳴ってしまった。

「こっちは死にそうに疲れてるんですよ！ 寒いし眠いしお腹は空しくし……ちょっとほっといて下さい！」

どうせ聞こえまい。
だが。

「そうか、寒いか、眠いか、空腹か。そりゃ悪かった」

……はい？

003：狐危うきに近寄らず（前書き）

お詫び

約2ヶ月も私用で更新が止まってしまい、申し訳ありませんでした。

今後も不定期＆亀更新になってしまう時期があるかもしれませんが、放棄することはないので、お付き合いよろしく願います。

003：狐危うきに近寄らず

＊ ＊ ＊

しゃべったあああああつ！

しゃべったよ！ この子妖怪としゃべったよ！

自分こそ化け物に近いことを忘れ、詠は命の恩人から後ずさった。流されたときにどこかに強打したのか左前足が痛むが、そんなことに構ってはいられない。転生してから三日間、最初の宴で出会った妖怪以外、出会う妖怪は全て捕食者だったのだ。その「妖怪＝怖い」と会話できる人間なんて、どんな恐ろしい力を持っているか分かったものじゃない。

普通に考えれば、しゃべれるからといって怖い力を持っているとは考えにくいのだが、襲われ流されパニックな詠は、冷静な判断が出来なかった。

「た、食べないで下さいっ！」

「はあ？ あ、ちよつと……」

呆氣に取られる少女を置いて、詠は恩人から逃げた。全力で。

一人残された少女は、何をするでもなし、ぽつんと座り込んだ。助けた狐に恩返しされるのではなく、全力で逃げられたのだ。落胆と、妙な虚しさと、脱力感が満ちてくる。

だが、それらは長くは続かなかった。茂みががさがさと動いて、彼女の連れが現れた。

「妹君、いかがされた？」

「あ、いや、別に……」

現れた連れは、先ほど詠を襲った黒狐だった。

* * *

「ひえええええー！」

本能が「逃げる！」と叫んでいる。いや、本能だけでなく、理性も「逃げる！ 全力で！」と叫んでいる。

が、痛みでもつれる足が倒木に引っかかり、詠は思いっきり転び、地面に頭を打ち付けた——はずだった。

「もふっ！？」

何か柔らかいものにぶつかる。それは優しく詠を抱きとめ、地面に下ろした。

「大丈夫か？」

「……へ？」

詠を抱きとめたのは、桜色の着物の少女の妖だった。

「にゃあああつ！ ご、ごめんなさいっ！ ごめんなさいです！ だから食べないでーっ！」

狐の体で精一杯の土下座。傍から見れば「伏せ」をしているようにしか見えないが。

「食べるつもりはない。……そんなに慌ててどうした？ 何かに追いかけられているのか？」

佐倉暦と同じくらいの歳だったが、和風美人というか倭撫子というか、少女は雰囲気がとにかく大人びていた。その不思議と安心する雰囲気に、ようやく詠は落ち着くことができた。

「人魂と黒い狐と妖怪としゃべる人間に追っかけられまして……」

「妖怪としゃべる人間？」

「あ、人間には追っかけられなかったんですけど、っていうか助けられたんですけど……」

和風美人な少女妖は、着ていた羽織を脱ぐと、それですぶぬれの詠を包んだ。ほのかに花の香りがする。

「安心しろ。誰かが追っけてきても、私が追い払ってやる」

「本当ですか……？」

ひくひくと鼻を動かしてみると、花の香りに混じって漂ってくる少女の妖気は、中々強い。「追い払う」と豪語するだけのことはある。

「……ところで、お前の名前はなんだ？」

「え？ さくらこよ……じゃなくて、詠です」

「良い名だな。私は朔弥さくやだ。……詠、と呼んでいいか？」

「どうぞどうぞ、もちろんオッケーです」

「そうか。良かった」

朔弥が笑顔を見せる。微笑んだ拍子に、彼女の黒髪に付けてあった桜の髪飾りが揺れた。

「そうだ、私の住処に案内しようか？ 食べ物もあるし、暖かいぞ南の峠にあるんだ」

「いいんですか？」

「ああ、構わない」

少女は詠を羽織に包んだまま持ち上げた。

しかし、ちょうどそのとき、近くの茂みが動いたかと思うと、

——あの黒狐が現れた。

「わあああつ！」

詠が叫ぶ。それに驚いた朔弥が彼女を取り落とす。不意をつかれ、反応できなかった詠は地面に落ち、バキッとはつきり音がして確実に左前足が折れた。

「痛っ！」

逃げなければ、と思うが、激痛で体が動かない。それどころか痛みでくらくらする。

いつの間にか頼りの朔弥は消えていて、その場には詠と黒狐の二匹しかない。

「た、食べないで下さい！ 水をかけたのはごめんなさい！ 目が怖いって言ったのもごめんなさい！ 逃げたのもごめんなさい！ ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

本日二度目の土下座。黒狐は相変わらずの鋭い目で詠を睨んでいたが、急に耳としっぽを垂れた。

その様子はまるで……

「……そんなに怖いのか？ 私は」

……しょんぼりした子犬そのもの。

「……はい？」

なんだろう、この豹変っぷりは。人間だったら、思わず抱き寄せて撫で回したくなるほどの哀愁が漂っている。

「日頃から若^{わか}にも妹君にも美雲^{みくも}にも『目付きを直せ』ときつく言われているのだが……生来のも故、今更直せと言われて直るものではないのだ」

「そう……なんですか？」

「ああ……理解してくれると有り難い」

憐憫を誘う黒狐の雰囲気^{きんき}に些か同情を惹かれ、詠は動かせない左前足を引きずって黒狐の傍に寄った。

「げ、元気出して下さい！ そういうときは笑顔です！ 笑顔の人を『怖い』なんて言う人はいませんか」

「そ、そうか……？」

「そうです！ ほら、笑顔笑顔！」

笑って見せようとするが、痛みでどうしても笑顔が引き攣る。が、引き攣っているのは黒狐も同様だった。

（何やってるんだろ、私……）

先程まで追う者と追われる者だった二匹がそろって引き攀った笑顔。しかもいつまでこの状況を続けられいいのか分からない。

しかし、終わりは意外にも早くやってきた。

「紫雲？ どしたー？」

詠を川から引き上げた少女が、茂みを掻き分けてやってきたのだ。

「あつ……」

「妹君……」

引き攀った笑顔のまま振り返る二匹。それを見て、少女は一瞬きよんとしていたが、すぐに笑い始めた。

「あつははははっ！ し、紫雲、なにその顔……」

「い、いえ、これはその、この狐が……」

「う、うける！ 今年一番笑える！」

知り合いに見られたショックは相当なものだったのだろう。その証拠に、黒狐は前にも増して凄まじく鋭い目付きで詠を睨みつけた。

「あ、あはは、はは……笑い疲れた……ところで、そっちの白いのはさっき溺れてた白いのだよね？ あたしから全力で逃げた」

「う……そ、そうですが……その節はお世話になりました……」

座ったままでは失礼だろうと思い、立とうとするが、左前足の激痛でそれどころではない。詠のおかしな動きに気づいたのか、少女は近寄ると詠を抱き上げ、前足に触れた。

「いったあああつ！ 痛い痛い痛い！ 痛いです！ 触らないで！」
「ごめんごめん。こりやぱつきりいっちゃってるねー。帰って優衣さんに見てもらおうか。獣医だし」

「妹君、それなら私が運びます」

……運ぶ？ どういうこと？

詠より一回りほど大きいだけの黒狐が、どうやって詠を運ぶのだろう？

狐の親子がよくやるのは、親が子の首筋を銜えて運ぶやり方だが……あれをやったら、確実に左前足を引きずることになる。

「け、けけけ、結構です！ 大丈夫です！ 歩けますから！」

「……何を勘違いしているのかは知らんが、この姿のままは運ばんぞ」

「へ？」

「妹君、木の葉を」

「はいよ」

少女が鞆から木葉を取り出し、黒狐の頭に乗せる。

次の瞬間、ドロンと煙が上がったかと思うと、黒狐の立っていた位置に黒髪の少女が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8396v/>

小狐レキの転生記

2011年11月12日12時00分発行